紹介

日支交渉史研究

秋山謙藏著

過去十有五年の長きに亙り、日支兩國を中核とする東亞諸國の交渉史の研究に專念して來た著者が、支那事變に依り兩國の基本的關係が急角度に轉回したこの歴史的なる時機に際し、日支關係の歴史的性格を闡明せんとし、有栖川宮奬學資金を拜受して續けた過去の業績を集成して一册の書となし、世に問うたのが卽ち本書である。

論述は序說・前論・本論・結論の四部に分たれ、日支交渉史研究の回顧と展望、歐人渡來以前の東洋に見る日本人の活躍、日支交渉の進展、鎖國—開國—東亞協同體の問題が取扱はれてゐる。前論・本論は通じて九篇四十一章より成り、豐臣秀吉の雄圖を中心とする日本人の海外發展に關する研究を冒頭に置き、次いで大化改新前後より、律令時代・藤原及院政時代・鎌倉時代・建武中興時代・室町時代を通じて、政治・經濟・宗教の各部門に亙る廣汎なる範圍に於いて日支交渉の史實をあとづけてゐる。此等の研究の根幹は概ね著者が既に過去に公けにした論文に於いて見られるのであつて、その多くが發表の當時世の賞讃を博したことは學界の周く知るところである。

さて本書を通讀して特に强く感ぜられることは、著者が日支交渉の具體的なる現れを、主として奢侈品の貿易に觀た結果、これを受容する貴族及び富豪階級の成立を以つてその原動力とする立場が著しいことである。氏はこの觀點から從來の日支交渉史が殆んど問題としなかつた國内の政治・經濟・社會の動向に注意を拂ひ、律令政治の發展、平安貴族の生活、武士・農民・商人の隆替錯雜した鎌倉時代・室町時代の大名の成立に就いて充分の注意を拂つてゐる。

併し乍らかゝる立場に於いては、日支交渉は動もすれば受容者たる日本に關し受動的な觀察に傾き、進出の場合も倭寇の如く掠奪の如き形態のみが注意せられ、至難なる日支交渉を現實に可能ならしめた我が國民精神の把握が極めて困難であることは注意せられなければならない。平安末期より鎌倉時代にかけて顯著であつた宋錢の輸入に就いて、著者は一應國内の諸産業の發展がこれを必然ならしめ、貴族以外の庶民も亦その一部に加はづたとしてゐるが、それが如何にして行はれたかに關しては何等記すところがないのは、その立場から導かるる當然のことながらとは云ひながら、現實の支那問題の處理に我々のすべての關心が蒐められてゐる今日、寂寥の感なしとしない。同じことはGoresの問題に於いても感ぜられ、琉球人の貿易發展の檢討に就いて、折角歴代寶案の如き貴重なる史料を發見し、それに依つて琉球の南海貿易が、琉球人の正使に依つて國王の信書は捧げられたが、實務に當

つた副使には本邦人が任ぜられた痕跡があることを折角認めながら、西洋人のゴーレス人はリケアに住むとの報告のみを取り上げ、藤田三高教授の研究に依つて明らかとなつた薩摩が當時（1612）と西洋人に依つて呼ばれてゐた事實を全面的には承認せず、從つて南海を縱横に活躍した所謂琉球人の貿易が實は日本の盛んなる精力に依存して始めて行はれたと云ふ最も大いなる問題が見逃されてゐるの觀がある。

これは著者が云ふ昭和型の歴史研究の大いなる風潮であるが、今や我國は多年の國内抗爭の惡を一擲し、擧國一致、興亞の大業に邁進せんとして、着々體制を整備しつゝあり、歴史學の傾向も根本より改まりつゝある。著者は既に日支交渉史研究の展望に於いて、社會全體のうちに學問があることを主張し、現實の「力」の把握を強く要求し、これを自らへの課題とし、已にこれを果しつゝあるのを觀る。今後の層一層の精進を祈つて止まないところである。（四六倍版本文六六三頁圖版一三頁、東京岩波書店發行、定價七圓）（赤松俊秀）

續日本思想史研究

村岡典嗣著

目次

第一部（序説）日本精神について、日本精神文化の研究と國學の學問的精神、日本思想史の研究法について、國文學の註釋的研究について。

第二部（本論）枕草紙と徒然草、神皇正統記白山本の學問的意義について、妙貞問答の吉利支丹文獻として有する意義、垂加神道の思想、日本の教育構成原理としての國學、市井の哲人司馬江漢、司馬江漢の獨笑妄言について、平田篤胤が鈴屋入門の史實とその解釋、鶴峰戊申の開國思想、明治維新の教化統制と平田神道、日本學者としての故チャンブレン教授、二鼠譬喩談と平田篤胤。

第三部（概説）、日本神道の特質。

この書は著者が昭和五年頃より既に各種の雜誌其他に一度公表したる論文を新たに輯錄して、さきの「日本思想史研究」の續編として出版されたもので、別段體系的な研究の發表ではない。併し乍らその内容に就いて言へば、その論考の過半數は近世に關するものであり、神道・國學に就いて述べられたものが多い事は注意を要する。紙上の關係上、今こゝにその一々を紹介する事は許されないが、只本書中第三部概説として比較的多數の紙數を費して掲載せられてゐる「日本神道の特質」なる論考を紹介するに止める。

「太古に淵源し、上古以來、儒教佛教又耶蘇教の外來宗教に對立して、而もそれらと交渉したばかりでなく、それらの影響や感化を、積極的にも消極的にも受けて、變遷し發達し來つた我國固有の宗教である」（四二二頁）神道が諸外教に對して同樣に有して居る特質としては著者は、曰く皇國主義、曰く現實主義、曰く明淨主義の三を擧げる。而して第一のものは神道の倫理的特質とでも言ふべく、第二のそれは哲學的特質、第三は政治的特質であると